

映画を利用した快適な英語授業をめぐって

鈴木, 右文
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5539>

出版情報 : 言語文化論究. 11, pp.191-197, 2000-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

映画を利用した快適な英語授業をめぐる

鈴木 右 文

1 はじめに

映画を利用した大学の英語の授業は、現在では何も目新しいものではない。しかし最近急速に普及しつつあるDVD (digital video disc) はその優秀な操作性のため、英語教育における映画の利用を促進するものと思われる。本論はフィルムによる上映しか手段のなかった時代の状況から論を起し、DVDに至るまでの映画媒体を簡単に振り返り、いかにDVDが英語の授業での利用に向いているかを述べ、DVDによる映画利用の英語教育の普及を唱えることを目的とした論考である。

2 フィルムの時代

ビデオが一般家庭に広く普及する以前の時代、すなわち1980年代前半までは、映画館以外で映画を鑑賞するためには、業者からフィルムを借りてきて上映するしか一般的な手段はなかった。このような方法は英語の授業に使用したくても事実上無理であったことだろう。

まずフィルムを借りての上映は、同時に多人数の観客が鑑賞することを前提としており、フィルムの賃貸料が高額であった。1980年頃に筆者がかかわった上映では、チャップリンの「モダンタイムズ」が映写機の賃貸料と映写技師の人件費込みで当時一日約8万円であった。これを仮に学生50名のクラス向けに借り出すとすれば1人当たりの負担額は約1600円となり、これだけで当時の教科書会社が発行していた平均的教科書の2倍の値段となる。

また、フィルムの上映には暗幕などを利用して、かなり暗い環境を用意しなければならなかった。¹⁾ 従って暗幕を装備した視聴覚教室がなければ上映はできなかつたし、あつたとしても冷房がなければ上映できる期間も限定されたであろうし、なにより学生がノートを取ることがほぼ絶望的に無理であつただろう。

更に、フィルムの賃貸料は1日限りの上映を前提としているので、授業で上映するとすれば、1回の授業で全編上映してしまわなければならない。複数回に分ければそれだけ賃貸料がかさむことになる。1回ですべてを上映するとすればそれだけで90分前後の授業時間をほぼすべて使ってしまう。従ってそれを越える上映時間の作品（大多数の作品が該当する）だと全編上映することはできないし、ましてや要所要所でフィルムを止めて英語表現や映画の内容に関してコメントする時間などはない。もしフィルムを止めて解説を加える上、フィルムの借り出しも1回限りであるとすれば、映画の一部分だけの利用となり、せっかくの作品が台無しになる。そんなことをするくらいなら、短い英文ニュースフィルムでも借りてきた方がましだということになるだろう。

加えて、フィルム上映には映写機設営・解体などの準備が要るので、授業で上映を実施

しようとするれば、上映場所となった教室はこの授業の前後の時間が他の授業に使用できないことになってしまう。

更に困難な点があった。日本語字幕を消す問題である。字幕があれば、学生は英語を聞き取ることよりも字幕を読んで作品自体を楽しむ方に注意を向ける。だが、字幕がないフィルムの入手は難しかったし、レンズに張り紙でもして字幕の部分を実物理的に見えなくするのは何とも無粋である。

これだけのクリアすべき条件があったのに対し、教育効果の方はあまり期待できない。普段聞き取りに慣れていない学生には、スラング混じりのナチュラルスピードの英語をノンストップで90分間に渡り1度だけ聞くだけではほとんど力が出なかつたことであろう。従って当時あえてこのようなやり方によって映画英語教育を推進した人はあまりいなかったであろうと想像できる。

3 ビデオの時代

1980年代にビデオの普及という新しい展開が訪れた。このことは大きく分けて2つの方法によって授業で利用する映画を入手することを可能にしたと言える。

ひとつは現在でも盛んなレンタルビデオ業者からの借り出しであった。字幕版を借りてくれば、2節で見たフィルム上映での問題点はほとんど解決できる。VHSビデオの賃貸料はわずかに数百円であり、スクリーンでなくテレビモニターの利用が可能なら暗幕も不要である。途中で映画を止めることも容易で、毎週借り出せば複数回の授業に渡る上映も可能である。映写機の問題もない。但し、日本語の字幕は常に表示されている状態なので、もし学生に字幕を見せないのであれば、テレビモニターの字幕の部分に紙を貼ったりはがしたりという作業が必要であった。更に問題だったのは、教員がすべての英語を聞き取っておかなければならなかつたことである。いかに英語教員といえども、2時間近くあるナチュラルスピードでスラング混じりの英語をスクリプトに起こす作業は大変な負担である。スクリーンプレイ出版のシナリオのようなものが入手できる作品でない限りはとても手軽な授業方法とは言えなかつた。

ビデオの普及が可能にしたもうひとつの映画の入手方法は、テレビ放送で放映される映画を音声多重で録画することであった。音声について日本語か英語かを選択することができ、授業中は英語を流せばよい。この場合レンタルビデオに比べて余計な日本語字幕が表示されないのは利点であったが、英語を書き起こす作業は相変わらず必要であった。また、放映時間の都合でほとんどの場合作品の一部がカットされていて、映画をきちんと鑑賞する立場からは問題がある。

4 クローズドキャプションの時代

英語のスクリプトを起こす負担の問題をある程度解決してくれたのはクローズドキャプションである。アメリカで聴覚障害者のために英語字幕を付けたもので、クローズドキャプション装置を利用すればこの字幕をスクリーンに映し出すことも消去することもできる。教員にとっては予習で聞き取りの困難な箇所にも莫大な時間と労力をつぎ込むような効

率の悪い努力をする必要がなくなる上、学生にも必要に応じて英語字幕を見せたり隠したりすることができる。これにより、何度か字幕なしで英語の聞き取りに集中させ、最後に正解を字幕で見せるといった授業方法が可能になった。

しかし、このクローズドキャプションにも問題がないわけではない。まず、表示スペースの関係上、字幕が実際に話されているセリフよりも短いものになってしまっていることが多い。単語すら聞こえてくるものとは別のものに置き換えられてしまっていることがある。またクローズドキャプションを付したビデオは、大抵の場合アメリカからの輸入になるので、利用できる作品が限定されてしまう。

5 レーザーディスクの時代

ビデオとクローズドキャプションの普及によって、英語教育における映画の利用はかなり促進されたと言える。しかしこの方法には大きな問題があって、レーザーディスクの利用が魅力的に思えるようになってきた。

まず音楽の媒体がカセットからCDに移行したのと同じ理由がビデオにも当てはまる。カセットに比べてCDは音質がよく、必要な曲を選択する場合カセットでは数分を要することすらあり、A面とB面の入れ替えが必要なこともあって煩わしいが、CDはカセットに比べて音質が良く、はるかに短い時間で選曲が完了し、A面B面の区別もない。またCDは半永久的に使用することができるが、カセットテープの場合は経年変化や高い頻度での利用や早送り・巻き戻しでのサーチなどにより劣化する。これと似て、ビデオよりレーザーディスクの方が必要な部分を頭出しするのははるかに容易である。実際に授業をしていると、全く別の箇所を参照したいという場合がかなりあるものである。レーザーディスクに収録されている映画は数十箇所に分割されており、それぞれの部分への頭出しは容易である。また、レーザーディスクの方が画質・音質ともに優れている。但しA面B面の区別はある。しかしリバース機能のついたカセットプレーヤのように、レーザーディスクプレーヤではディスクの入れ替えを行う必要はない。更に、レーザーディスクは半永久的に使用できるのに対して、ビデオは経年変化や高い頻度での使用や早送り・巻き戻しなどによる劣化が避けられない。

レーザーディスクには大抵の場合クローズドキャプションが付いており、プレーヤでコントロールすることによってキャプションのオン・オフは自在である。ビデオの場合はビデオプレーヤの他にキャプションデコーダーが必要であるが、レーザーディスクでは専用プレーヤが一台あれば済む。

また、ビデオには規格の問題がある。例えばイギリスのビデオはPAL方式と呼ばれ、日本で最も普及しているVHS方式とは規格が異なっており、PAL方式のビデオをVHS方式のレコーダーで再生することはできない。全世界対応ビデオという製品があってPAL方式もVHS方式も再生できるが、他のVHS専用機種に比べて価格が高い。

6 DVDの時代

1999年現在（執筆時）、最新の映画媒体はDVDである。レンタルビデオ店ではVHS

ビデオの後、S-VHSやレーザーディスクの導入のペースは鈍く、現在まともに扱っているレンタルビデオ店は少ない。ところがDVDはソフトの急速な充実とともに店頭で多く並ぶようになってきている。レーザーディスクは大きくて、専用のプレーヤが必要であったが、DVDは当初こそ専用のプレーヤが必要であったものの、現在ではパソコンにDVDドライブが標準で装備されるようになってきており、再生できる機器の種類がレーザーディスクよりも圧倒的に増えそうである。

レーザーディスクに比較してDVDの方が優れている一般的な点がプレーヤの問題の他に4つある。1つは、ディスクがはるかに小さく、携帯性に秀でていることである。²⁾ またディスクが片面なので、レーザーディスクのように面が代わるときに映像が長時間途切れることがない。更にDVDの方が容量が多いので1作品が1枚で済むのに対し、レーザーディスクでは往々にして2枚組となり、2枚目を扱っているときに1枚目に収録されている部分に戻すのはかなり時間のかかる作業である。4つ目としては、音が更に改善されているということである。筆者はかなり立派なサウンドシステムを装備した教室を利用してDVDによる授業を試みたが、映画館並の音響効果が可能である。

しかし、レーザーディスクとDVDの英語授業にとっての最も重要な相違はキャプションにある。レーザーディスクのクローズドキャプションには致命的な欠陥があり、一時停止をかけるとキャプションが消えてしまう。学生に聞き取りにくそうな箇所でも一時停止をかけてゆっくりキャプションを見せることができないのである。³⁾ これに対しDVDでは一時停止をかけてもキャプションが消えずに読むことができる。

DVDでは音声について 1) 英語 2) 日本語吹き替えの2つが選択できる。またこのいずれを選択中でも、キャプションについては 1) オフ 2) 英語 3) 日本語のどれでも選ぶことができる。ビデオやレーザーディスクでは、字幕版と吹替版に分かれており、字幕版を導入すると、音声は常に英語、字幕は日本語か英語となる。これに対し、DVDでは「英語音声×字幕オフ」「英語音声×字幕英語」「英語音声×字幕日本語」「日本語音声×字幕オフ」「日本語音声×字幕英語」「日本語音声×字幕日本語」の6通りの組み合わせが可能である（「音声オフ」は考慮に入れていない）。これにより実に様々な授業方法に対応できる。

7 DVD授業の実践と普及上の課題

筆者は1999年度前期にDVDに収録された映画を利用して英語授業を2クラス実施した。いずれも「マディソン郡の橋 (The Bridges of Madison County)」⁴⁾を使用した。1つは九州大学工学部のあるクラスで、50名程度の1年生を相手に、暗幕で暗くした情報教室の中でプロジェクターから投影して実施した。音響の設備が抜群で劇場並であった。もう一つは西南学院大学文学部外国語学科英語専攻と英文学科合同の英語演習Iで、20名程度の1年生を相手に、LL教室でTV画面に映しながら実施した。前者のクラスの方が有利だったのは大スクリーンと迫力のあるサウンドシステムが利用できたことだが、後者のクラスでは部屋が暗くならない分メモも容易にとれた。

この授業で確認できたことは、やはりDVDの操作性が優秀で、同じ作業を実施するのにVTRやレーザーディスクよりもはるかに迅速で快適であるという点と、一時停止時に

字幕が出たままになっていて読み取りやすいという点である。今後映画を使用して英語の授業を担当する場合にはぜひDVDで実施したいと思う。

今後DVDを利用した映画授業が普及するには条件が幾つかある。まずLL教室などでDVDが使用できる環境を整えることである。レーザーディスクの時代には、CD、MD、レーザーディスクなどがかけられるマルチディスクプレーヤがあったが、1台でDVDを含めて何にでも対応できるデッキはない。従って新たにLL教室などにDVD利用のためだけに専用プレーヤを設置する費用が必要となるが、その投資に見合う利点は十分にある。上記2つの授業のうち九州大学で実施された授業では、たまたま情報教室の設備の設計の段階でDVDに興味のある外国語以外の教員がDVDデッキを情報教室に設置する機器のリストに加えてくれていたので助かったのだが、西南学院大学で実施された授業では一工夫必要であった。西南学院大学にあるLL教室(5室)・AV教室(5室)にはDVDプレーヤの設備がなく、ビデオライブラリーに設置されている個人視聴ブース用のものをLL準備室の係員が毎回授業前に移設して外部入力端子に接続し、授業後には原状復帰するという面倒をかけることになった。⁵⁾ DVDの利用者が筆者しかいない状況では新たにDVDデッキを増設するよりもこのような便法をとる方が都合がよいらしいのだが、設備があつてこそ利用が促進されるという側面もあるので、各大学でLL教室にぜひDVDデッキを設置していただきたい。LL教室の外部入力端子へ接続するのであればDVDデッキ単体だけの費用で済み、わずか数万円の投資のはずである。どうしてもこの投資が認められないのであれば、せめてLL教室付属のコンピュータの更新時にはDVDドライブとDVDムービーの再生ソフトがついた機種を選定して欲しい。

次に、DVD自体の普及である。DVDは様々の利点から見て普及していくであろうと思われるが、品揃えを豊かにすることが肝要である。現在の段階ではまだまだDVDで見られる作品はビデオで見られる作品に比べてはるかに少ない。しかしこれについては大学の教員が貢献できる余地はほとんどない。

3番目に、英語担当教員に対し映画を英語授業に利用する気になってもらうことである。「映画英語教育学会」なるものも登場して久しく、映画から英語表現を学ぶことを主眼とした実用書の類も少なからず出版されており、スクリーンプレイ出版のシリーズのように英語授業向けのシナリオも出回っていて、世の中全体としてその素地はあるように思われる。必要なのは、大多数の英語教員が教材を探すために見る教科書会社のカタログにDVDが教材として掲載されることではないかと思われる。ビデオ教材を扱う例は枚挙に暇がないのだから、便利なDVDはきちんと宣伝すれば普及すると思う。DVDとシナリオを組み合わせた教材などの開発も待たれるところである。一般に教科書会社の教科書はタスクが細かに設定されていて、教科書に書かれた指示どおりに授業を進めれば授業が何とか成立するというものが多いのだが、DVDでは「英語字幕を消してこの部分を見てみよう」「英語字幕をオンにし、音声をオフとして自分でセリフを言ってみよう」といったビデオでは困難なタスクが可能であり、DVDはまさに教科書を作りやすい媒体ではないかと思われる。

8 おわりに

本稿では、英語教育におけるDVDの利用がいかにかこれまでの媒体に比べて優れていて便利なものであるかを示し、その普及を訴えた。

注

- 1) ビデオの時代に入ったときも、現在のように教室を暗くしなくてもスクリーンに投影できる高輝度のプロジェクターはなかった。
- 2) 通勤カバンにレーザーディスクは入りきらないことが多い。また、学生にディスクを購入させて（1枚4000円弱程であり、2人で1枚を共有させれば一般の教科書並の値段で済む）、携帯性を活かしてポータブルDVDプレーヤ（現在は約15万円もする）で自習させるならば、通学の途中などのいわゆる隙間の時間の活用になる。ウォークマンと同じ感覚である。但し廉価なプレーヤの登場によりカセットやCDのように一般家庭にDVDが普及しなければ絵に描いた餅でしかないが。
- 3) 初めてレーザーディスクによる英語授業を検討して予行演習したときこの事実に気づいて愕然とした。もしかしたら筆者が寡聞にして知らないだけで、良い解決方法があるのかもしれない。そうであれば不明を恥じ入るばかりである。
- 4) 監督はKlint Eastwood、主演はKlint EastwoodとMeryl Streep。日本では1995年に公開された名作であり、『キネマ旬報』では年間ランキング第3位に選出されている。特にこの作品でなければならぬ理由はなかったが、比較的英語が平易であることその他は筆者の好みである。
- 5) このような面倒な作業を毎週してくださったLL準備室のスタッフの皆さんに紙面を借りて御礼申し上げます。2000年度ももしDVDを利用した授業をすることになれば同様の取り扱いをしてくださるとのありがたいお申し出もいただいた。

yubun@rc.kyushu-u.ac.jp

Digital Video Discs in English Classes

Yubun SUZUKI

It is interesting to use a movie in English classes. Although watching a movie in a classroom must have been extremely difficult for various reasons until early 1980s, the appearance of video cassettes made it possible to utilize a film in English courses rather easily.

Later introduction of a closed caption decoder enabled us to show a movie to students with English speeches on a screen, rendering the use of video still more attractive. There were disadvantages, however, in the employment of a video cassette compared with the newer device of laser discs: for example, it often takes more than a few minutes to rewind a video cassette to get to a necessary part of a film whereas such an operation is far less time-consuming in the case of laser discs.

Still more innovative is a digital video disc (DVD), which, among other advantages, is free from a problem laser discs have that making a pause erases lines on a screen.

The present article attempts to advocate English classes capitalizing on DVDs in consideration of their convenience.